

記者会見 俳句から見た戦後の日本社会

記者クラブ 2017・11・16

俳句から見た戦後の日本社会 現代俳句協会会長 宮坂静生

―「現代俳句協会が果たしてきた役割をこめて、総括的に」

1、「第二芸術論」(「第二芸術―現代俳句について」) 桑原武夫(昭和21・11「世界」)の反響から始まる戦後の俳句界

「第二芸術論」の主旨 これから始まる戦後は西洋の近代思想、芸術などに漲る進取な精神を教育や生活に取り入れることが必至なのに俳句や俳句界にはそれが無い。現代俳人の俗人性や俳人集団の徒弟的な前近代性、俳句の持つ無思想、退嬰性^{たいえいせい}などは現代人が心魂を打ち込む芸術とはいえない。本来の芸術とは区別し、「第二芸術」と呼び、大人は自由であるが、学校教育からは締め出してほしい。◎その主な反論18編。俳句の固有な俳句性(伝統的な表現技法や情緒など)への無理解、西欧的な論理、感性で教条的に割り切る無謀さなどを指摘。

2、現代俳句協会の設立(昭和22・9)による戦後の俳句の出発
設立の主旨 30代15人、40代21人、50代2人合わせて38人が創設会員。
戦前の虚子や風生、秋櫻子など老大家を除き、
俳句界の中堅俳人、評論家、俳文学者が参加。戦前の新興俳句運動の推進者、人間探求派俳人、無季容認俳人など。石田波郷(34)、西東三鬼(47)、神田秀夫(34)の三人が組織発起人。中村草田男(46)、加藤楸邨(42)、山口誓子(46)、山本健吉(40)、横山白虹(48)、富澤赤黄男(45)、池内友次郎(41)など。
暗に第二芸術論への反撥がある。会員の原稿料、講演料など生活権の擁護し、現代俳句の質的な向上を目指す母胎になる。そのために季刊誌発行、懇談会を設けて結束する必要がある。

◎昭和28年には戦後世代俳人が出そろおう。現代俳句協会「復興期」金子兜太(34)、飯田龍太(33)、高柳重信(30)、石原八束(34)、佐藤鬼房(34)、原子公平(34)、森澄雄(34)、桂信子(39)などが入会。

3、戦後の俳句の主要テーマ「思想性」「社会性」(散文的要素)と「感性による純粹詩性」(詩的要素)との結合

中村草田男句集『銀河依然』(昭和28)跋に指摘。ここあたりから「俳句の社会性」(俳句において社会性をいかに具象化するか)論議が戦後における重要なテーマになる。

沢木欣一「社会主義イデオロギーを根底に持った態度などから詠まれた俳句」の主張をめぐり論争が展開する。山本健吉らの反対、金子兜太「社会性は態度の問題」との支持など。

金子「造型俳句論」(昭和32「俳句の造型について」)が出色。俳句は単に風景を写生するものではなく、主体が自分の考え・感性を働かせて意識的に「造型」するものという。以後の金子俳句論は深化する根底はここにある。

4、1960(昭和35)年安保の年が戦後俳句の曲がり角

戦後俳句の総括(「俳句第二芸術論」から「軽み」まで)

①昭和20年代―俳句の根源探求(現代空間への挑戦)

「炎天の遠き帆やわがこころの帆」(山口誓子)

②昭和30年代―社会性俳句論議、前衛俳句・抒情の回復

「彎曲し火傷し爆心地のマラソン」(金子兜太)

③昭和40年代―伝統回帰(もう戦後ではないという意識)

「一月の川一月の谷の中」(飯田龍太)

④昭和50年代―高齢化社会へ「軽み」(日常重視)・虚子の評価

山口青邨(96歳)、富安風生(95歳)、阿波野青畝(93歳)

「天皇の白髪にこそ夏の月」(宇多喜代子)

◎私の60年安保―6・15「権美智子のひとりの死」(社会的死)

「悩む」から「目覚め」へ。

「白萩や妻子自害の墓碑ばかり」(宮坂静生) 大日向開拓地詠

5、ポスト戦後(60年安保以後)―俳句自在・大衆化

①軽快俳句の騎手―必然の予告「空蟬となりたることをまだ知らず」(鷹羽狩行)

②ことばの本意探求―言霊への憧れ「春の水とは濡れてゐるみづのこと」(長谷川權)

③口語調俳句の普及―俳句の片言性「三月の甘納豆のうふふふふ」(坪内稔典)

④ 地貌探求―産土（土・水）再発見・都鄙俳句意識への反発、
地貌季語の発掘による季語体系の見直し

「パズル」俳句批判

「霜夜なり胸の火のわが麤蝦夷」（佐藤鬼房）

「榛の沖よりつながって馬肥瞽女」（齋藤美規）

「逝く母を父が迎へて木の根明く」（宮坂静生）

「半殺しとは深熊野の土用餅」（茨木和生）

⑤ アニミズム志向・「存在者」の視点

「長生きの臍のなかの眼玉かな」（金子兜太）

「草枯れて地球あまねく日が当り」（大峯あきら）

6、昭和から平成、そして平成以後

長い歲月、戦災、満州・シベリア戦没者、原爆、ビキニ水爆被
災、そして阪神淡路大震災、3・11、フクシマ原発災害以後―「死
者も現存者ともに存在」

「満里子・勝也黄砂となりて帰りしか」（渡辺真帆）

「双子なら同じ死顔桃の花」（照井 翠）

「除染とは地べた剥ぐことやませ来る」（伊藤雅昭）

「折るべき天とおもえど天の病む」（石牟礼道子）

「泥かぶるたびに角組み光る蘆」（高野ムツオ）

◎ 戦後俳句への総括―ともかく戦争がなく「平和」であった

「生の人間の生の言葉を俳句史にぶち込む」

―存在と存在者（金子兜太）

「自分の半生の句業を貫くものが、生の人間の生の言葉を俳句
史にぶち込んで、自由という土壌を開いたことが自分の仕事で
あった」（「朝日賞」受賞の言葉）

■立春の米こぼれをり葛西橋

石田波郷

当時の葛西橋は木造。米一粒が宝であった敗戦直後、だれかが米をこぼしていった。早春の光りに耀く米に、作者の心情を重ねた句。

■おそるべき君等の乳房夏来る

西東三鬼

もんぺを脱いだ女性たちが自由を得て街を闊歩するようになった。その肉体の量感に圧倒される。

■地の涯に悴せありと来しが雪

細谷源二

空襲で一切を失い、いささかの希望をもつて北海道開拓民として入植。十勝の泥炭地で辛酸の生活をはじめ。

■ふところに乳房ある憂さ梅雨ながき

桂 信子

若くして寡婦。自活自立のために企業に勤務。男性社会のなかで女性ならではの「憂さ」を抱える。

■夏みかん酸っぱしいまさら純潔など

鈴木しづ子

米軍キャンプ近くでダンサーとして生きる。その境涯を俳句にぶっつけ発表したことから、諸々の風評にさいなまれる。

■納涼映画に頭うつして席を立つ

田川飛旅子

公園や広場で映画が上演されていた時代。だれかが立つとその頭の影がスクリーンに映り、せつかくの画面が白無しになる。団扇で蚊を拂いながらの映画見物であった。

■未婚一生洗ひし足袋が合掌す

寺田京子

胸部疾患のため療養の生涯を過ごす。足袋を干す。左右の足袋がまるで合掌しているように下がっている。足袋を履いて歩くことを願っているのだろう。

■古佛より噴きだす千手 遠くでテロ 伊丹三樹彦

千手観音を拝みつつ、異国で発生したテロをおもう。佛の手が作者の噴き出す心中に思われる。いまだテロが身辺事として感じられなかった時代の句である。

■昭和衰へ馬の音する夕べかな

三橋敏雄

荷役のために、農耕のために、または軍馬として、馬の力に助けられたのが昭和であった。いつしかあらゆる機器が馬にかわっていった。昭和への挽歌である。

俳句から見た戦後社会

—社会性俳句の周辺作品について—

安西 篤

○社会性俳句作品の流れ

- | | |
|------------------|------------|
| 水脈の果て炎天の墓碑を置きて去る | 金子兜太（昭二一） |
| 暗闇の眼玉濡らさず泳ぐなり | 鈴木六林男（昭二三） |
| マンホールの底より声す秋の暮 | 加藤楸邨（昭二六） |
| 潮とびの寒暮いたみし馬車通る | 佐藤鬼房（昭二七） |
| 鉛筆の遺書ならば忘れ易からむ | 林田紀音夫（昭二八） |
| 塩田に百日筋目つけ通し | 沢木欣一（昭三〇） |
| 彎曲し火傷し爆心地のマラソン | 金子兜太（昭三三） |
| 少年来る無心に充分に刺すために | 阿部完市（昭三七） |

○戦後社会性俳句の特色

- ・戦後革新の波に乗って出発した戦後俳句は、昭和二十年から三十年代を通じて社会性の自覚に目覚めた自己表現を目指した。
- ・ここでいう「社会性」を、作者の態度の問題と指摘したのが金子兜太であった。つまり作句の態度を踏まえて表現方法を意識すべしと方向づけたのである（造型俳句論）。これによって四十年代以降の前衛俳句といわれる時代の流れを作ることになる。
- ・一方、昭和三十六年、六十年安保後の日本文化全体の保守化・古典帰りの傾向の中で、現代俳句協会の分裂が起こる。これは、あくまでも自己表現を重視する立場と俳句形式こそ優先すべきという立場の違いであるが、当時四十歳代までの若手と五十歳以上の長老派との世代的対立の構図となつて、時代の波の中で先鋭化していった。
- ・しかし、四十年代後半以降、俳句の大衆化と家庭電化の影響から女性に生活のゆとりを生じ、ことに知的中年女性層への俳句の浸透が進む。これが五〇年代以降の俳句ブームにつながる。それがまた保守・革新という思想的対立をも融合化していく。その時代の波をリードしたのも金子兜太であった。

現代俳句協会創立70周年記念行事

◆第一部70周年記念第54回現代俳句全国大会

◎日時 11月23日(木・祝日)

午後1時～5時

◎場所 帝国ホテル本館3階「富士の間」

◎特別記念講演・シンポジウム

「俳句の未来・季語の未来」

講演 宇多喜代子

シンポジウム 夏井いつき・岸本尚毅・渡辺誠一郎・小林貴子・

神野紗希(司会)

◎受賞式

現代俳句全国大会賞・毎日新聞社賞・読売新聞社賞・東京新聞賞

朝日新聞社賞・日本経済新聞社賞・産経新聞社賞

俳句のまちあらかわ賞

◆第二部70周年記念式典・祝賀会

◎日時 11月23日(木・祝日)

午後6時～9時

◎場所 帝国ホテル本館2階「孔雀の間」

以上